

名古屋大学

NUA
archives
university
nagoya

大学史資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第16号

目次

Contents

大学文書資料室の発足によせて	2
「伊藤圭介顕彰会」二つの資料と地域教育・大学 史林遍歴(8)	3
資料室だより	6
資料室日誌(抄)	7



伊藤圭介座像(鶴舞公園)と「伊藤圭介先生誕生之地」碑(名古屋市中区)(本文3~5頁参照)

大学文書資料室の発足によせて

名古屋大学副総長 佐々木雄太

名古屋大学「大学史資料室」は、2004年4月1日より「大学文書資料室」として再出発する。「名古屋大学五十年史」の編纂を目的に1985年に設置された「大学史編集室」がその役割を終えた後、1996年に大学の共同教育研究施設として「名古屋大学史資料室」が設置された。以来、同資料室は、名古屋大学に関わる歴史的な資料の収集・整理・保存・活用を主要な任務として活動を続けてきた。その足跡は、すでに7巻を数えた『名大史ブックレット』や『名古屋大学史資料室保存資料目録』、『名古屋大学史紀要』等として残されている。また、いつからか「名大トピックス」の裏表紙に、学内外に点在する名古屋大学の歴史に関わる記念物の紹介が掲載されていることにお気づきの方が多いだろう。この記念碑、記念樹、記念建物等に関する「ちょっと名大史」も、大学史資料室のすぐれたアイデアと丹念な歴史踏査の産物である。一方、1999年からは、共通教育科目（現在の全学教養科目）のひとつとして、大学史資料室のスタッフによる「名古屋大学の歴史」が開講されている。学生が自らの大学の歴史を通して日本の近代史を学び、あるいは日本近代史の中での名古屋大学を考えるというユニークな試みである。

「名古屋大学史資料室」が「名古屋大学大学史資料室」に改組された2001年頃から、学内においてこの資料室の将来構想の検討が始められた。2001年10月17日付の「大学史資料室将来構想（案）」は、「情報公開社会における開かれた大学を目指す名古屋大学は、大学基盤施設として図書館および博物館との連携を視野に入れた大学アーカイブズを創設することが必要である」と謳い、L（Library）、M（Museum）と並ぶ施設としてのA（Archives）の設置を構想している。また、同年12月に「アーカイブズ創設」に関する審議資料としてまとめられた文書は、その設置の意義を「記録史料学の確立・発展への貢献、情報公開社会における本学の文書管理運営支援、本学における教育研究活動支援、としている。

「大学史資料室」の発展の選択肢として、「記録史料

学」に重点を置いた方向も考えられた。しかし、今回の改組は、上記に役割の重点を少しシフトさせ、資料室の「歴史資料館的機能」とともに「公文書館的機能」を充実させようというものである。



大学の文書・記録のライフ・サイクルは、（１）記録の発生から記録の職務利用段階である「現用記録」、（２）職務利用のための記録管理の段階である「半現用記録」、（３）記録史料の保存・公開・活用という「非現用記録」の段階へと連なっている。じつは、情報公開に関する法律の制定以後、本学を含めて大学を悩ませているのは、「半現用記録」の管理と情報公開への対応の問題である。そもそも大学文書の多くは、各部局や事務組織の諸セクションにおいてそれぞれに作成され保管される。統一的な「文書ファイル管理システム」が一応示されてはいるものの、個々の部局や担当者に任せられた文書のファイリングは必ずしも統一的に行われてはいない。また、保存義務期間を過ぎた文書・記録の選別・廃棄も個々の係員に任かされている。専門的知識を持たない事務職員にとって、記録の評価選別は、実際には手に余る仕事である。その結果、いざ「半現用文書」の検索・利用という時に、様々な不便や不都合が生じることになる。さらに、このような事情も手伝って、情報公開法に基づく文書開示請求があった場合の対応には、大変複雑な手続きと、職員の多大な労力や時間を要しているのが現状である。

文書・記録管理と情報公開に関するこのような問題を解決するひとつの方策が、専門的スタッフから成り、総務省の認可を受けた文書・記録管理施設の設置である。「大学史資料室」の「大学文書資料室」への改組は、その第一歩を意図している。今回の改組によって、名古屋大学における文書・記録の整理・管理がシステマチックに行われ、また情報開示請求への対応が迅速かつ効率的に実施されるようになることが期待され

る。

他方で、これまで「大学史資料室」が果たしてきた記録史料の保存・公開・活用など「歴史資料館的機能」が、これから先、小さくなることはないであろう。名古屋大学全学同窓会の発足に伴って、10万人を数える同窓生による「名古屋大学アイデンティティ」の探求が勢いを増している。「ちょっと名大史」や学生向けの名古屋大学史講義は大変評判が良い。名古屋大学に文化を育て根付かせるために「大学文書資料室」が活躍する場面は増えていくに違いない。

今回の改組はじつにささやかなものである。限られたスタッフに、これまでに倍する職務を担ってもらうことになる。文書保存の固有のスペースも十分には用意されていない。あえて现阶段で「名古屋大学アーカイブズ」を名乗らなかったのは、これが発展途上であることを顕示しておこうという意図からでもある。やがて、全学的支援の下で、「大学文書資料室」が、文書・記録管理、歴史資料の活用の両面にわたる実務ならびに研究・教育機能を備えた「大学アーカイブズセンター」に発展することを期待したい。

おしらせ

上記佐々木副総長の寄稿文にも書かれていますように、「大学史資料室」は2004年4月より、新たに「大学文書資料室」として再出発することになりました。従来は名古屋大学にかかわる歴史的資料の恒常的な収集、整理、保存及び活用並びに調査及び研究中心に活動してきましたが、新しい「大学文書資料室」は、これに加え、名古屋大学の情報の公開に積極的に対応するため、名古屋大学の半現用文書の管理、調査、研究を行う機能をもった施設として、新たな活動を展開していく所存です。今後ともご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

「伊藤圭介顕彰会」二つの資料と地域教育・大学 史林遍歴(8)

伊藤圭介と顕彰会

伊藤圭介は、1803(享和3)年に名古屋に生まれた医者ですが、長崎でシーボルトに師事したのち、名古屋で博物会開催などの活動を行った本草学者としても著名です。尾張藩における種痘所の設置や名古屋大学の前身である仮医学校・仮病院の設置にも関与しています。明治維新後は新政府に招かれたのち、東京大学理学部教授となり、日本最初の理学博士の称号を得ています。晩年はたびたび名古屋に帰り、仮医学校の後身、愛知医学校の奈良坂源一郎らが主宰していた博物会活動などにも関係し、この地域の博物学の展開に寄

与しています。

圭介は1901(明治34)年に亡くなりましたが、その後2度にわたって、彼の顕彰活動が行われています。1度目は1937(昭和12)年から39(昭和14)年にかけてで、きっかけは当時名古屋医科大学の附属医院長でした勝沼精蔵が、名古屋市・愛知県・商工会議所などの地元関係者を名古屋市公会堂に集めて、圭介



伊藤圭介

の銅像を建設したいと提唱したことにはじまります。しかしこの時は、銅像建設までには至りませんでした。ただその際、地元の医学史研究者である吉川芳秋から「伊藤圭介遺墨遺品展覧会」の開催が提案され、1937（昭和12）年3月20日から25日にかけて市立名古屋図書館（現名古屋市鶴舞中央図書館）で実施されました。翌1938（昭和13）年8月には「伊藤圭介先生遺跡顕彰会」が設立され、勝沼が会長に就きました。翌1939（昭和14）年1月22日には圭介の菩提寺である光勝院で追善法要を行い、ついで圭介の生家跡地である名古屋市東区呉服町4丁目2番地に「伊藤圭介誕生之处」の碑が建てられ、圭介の誕生日である1月27日に除幕式が行われました。あわせて近くの大成尋常高等小学校（現名古屋市立名城小学校）で記念講演会や展覧会も開かれました。このほか1936年から39年にかけては、圭介に関する本も多く出版されています。

2度目は1955（昭和30）年から65（昭和40）年にかけてです。1955（昭和30）年に圭介の関係資料が、ご遺族の伊藤一郎さんから名古屋大学附属図書館へ譲渡されました。この資料は数度の空襲からご遺族が守り続けてきたもので、当時第3代名古屋大学総長となっていた勝沼が強く希望し、ご遺族が同意されて譲渡が実現しました。この資料については、翌1956（昭和31）年に『伊藤文庫図書目録』が附属図書館から刊行されています。これがきっかけとなったのでしょう、同年6月に今度は「伊藤圭介先生顕彰会」という名称で顕彰会が再度設立され、その会長にまた勝沼が就任しました。翌1957（昭和32）年5月5日鶴舞図書館前に圭介の座像が建てられ、また1961（昭和36）年3月15日には前述の名城小学校と御園小学校（名城小学校分校から同年4月に独立）に同一型の圭介の胸像が建てられています。このほか圭介の生家跡地にある「伊藤圭介先生誕生之地」の碑も、この会によって1958（昭和33）年1月17日に再建されています（1939年に建てた碑は空襲で廃毀）。また吉川芳秋著『伊藤圭介翁：日本最初の理学博士尾張医科学文化の恩人』も1957（昭和32）年にこの会から刊行されています。このほか1957（昭和32）年の春には東山植物園内に、1965（昭和40）年3月17日には吹上小学校にも胸像が建られています。

二つの「伊藤圭介顕彰会」資料

この2度の顕彰の両方に登場するのが、圭介生誕地の近くにある名城小学校（旧大成尋常高等小学校）と、



伊藤圭介先生生誕遺蹟碑建設記念写真 1939年
（名古屋市東山植物園所蔵）

名古屋大学の勝沼精蔵です。名城小学校にはいまでも「伊藤圭介先生顕彰会」がおかれており、ここには両方の時期の資料が各々残されています。ひとつは表題に「昭和十三年六月 伊藤圭介先生生誕碑其他関係書類綴」と書かれた綴で、「吉川」の名が記されています。推測するに、吉川芳秋が顕彰会へ前例となる参考資料として提供した1938年「伊藤圭介先生遺跡顕彰会」の資料と思われます。内容としては、碑建設計画案、顕彰会趣意書、準備のための各回の協議事項や内容、事業・会計報告書などが綴られています。また植物学者として著名な牧野富太郎も賛助会員として名簿に名を連ねており、また除幕式には招待され、記念講演会で講演しています。資料の中には、

此の儀（＝建碑）が、勝沼名醫大教授、阪谷市立名古屋図書館長、浅野名市観光課長、三堀名市保健部長、植物学者梅村甚太郎氏その他學者、郷土史家、関係者の間で着々と進められ、前記旧宅現住の宮治氏をはじめ同町所在の町田大成小学校長、水谷呉服町総代、地元聯区民等非常な意気込みで、（中略）顕彰実現せんものと寄々協議中である。

と記されている文書も綴られています。

もうひとつは表題に「昭和三十六年三月 伊藤圭介先生胸像除幕式関係綴」と書かれた綴です。これには胸像完成記念パンフレット、除幕式案内状、同式次第、同案内名簿、除幕式関係の諸原稿などが綴られています。またこの綴とは別に顕彰会趣意書も存在しますが、その役員名簿に記載されている方の肩書は、圧倒的に地元の学校教育関係者です。大学関係者も1936年の顕彰会では勝沼ひとりであったのに対し、ここでは9人も名を連ねています。この胸像建設は顕彰会が設立された1956年（昭和31）頃から募金を行い、おもに愛知県下の小中高校大学の学生生徒約50万人によって200

万円余が集められました。地元の名城小学校校長村瀬内匠ほか、この地域の学校教員の協力が大きかったといわれています。胸像にも「こどもたちが5年間おこずかいを節約して建てた」と記されています。

このように、碑や胸像を建てた2度の顕彰会活動は、先の顕彰は行政や地元の郷土史家、植物学者が関与した地域的・研究的傾向が強かったのに対し、後ののは地元教育界の主導による地域的・教育的傾向が強かったことがわかります。

地域教育と大学

しかし、戦前の胸像建設においては地域教育的思想が全くなかったのでしょうか。戦後勝沼は次のように述べています。

当地でも、小学校などの教育において、郷土の偉

材の事蹟を、郷土の地理・歴史に繰入れて、指導目標として役立たせることが望ましい。スコットランドにジェームス・ワットの銅像があり、ステイーヴンソンの最初つくった機関車があり、巴里にパスツールの銅像があつたりなどして、その前に先生と生徒、あるいは親と子が並んで、彼らの業績を追慕していた姿は、今なお私の忘れがたいところである。日本でも、名古屋でも、このような情景が願わしいと思うのは、決して私一人にはとどまらぬであろう。(勝沼精蔵『桂堂夜話』1955年、145～146頁)

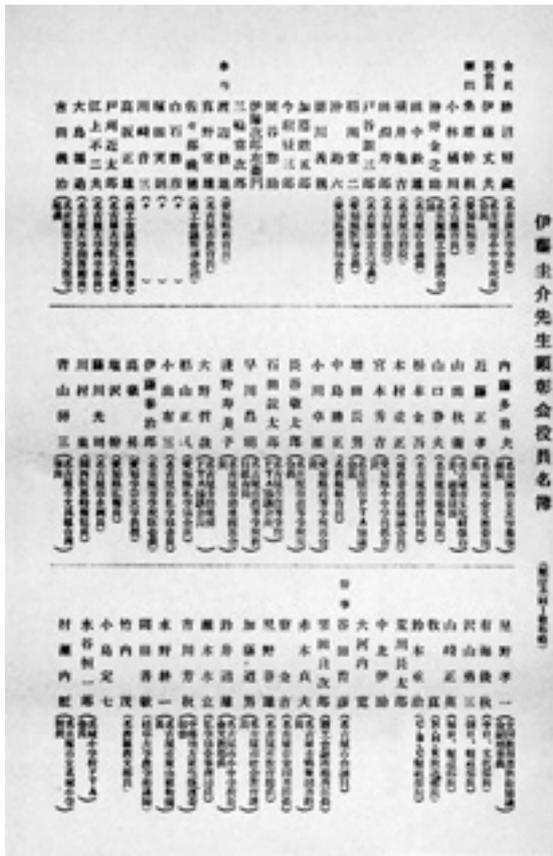
ところが先の地元関係者を名古屋市公会堂に集めて、圭介の銅像を建設したいと提唱した1937年(昭和12)に、地元の生徒に「自分たちが建てた」という気持ちを育てたいので、生徒たちにその費用を負担させたいと勝沼は述べており、地域教育的側面を戦前からすでに表明しています。胸像建設における地域教育的思想は戦前から存在していたと考えられます。

となると問題は、このような思想が存在しながら、なぜ戦前には実現しなかったのかということになります。時局が戦争への道を進んでいたために実現しなかったかもしれません。ただもうひとつ別に、このような地域教育的思想があつたにもかかわらず、それを実現させる受け皿＝実施主体が、地域あるいは教育界に存在しなかったとも想定できます。

またさらにもうひとつ考えたいのは、地域教育と大学との関係です。戦前の名古屋大学は研究的側面から顕彰に関わっていたと思われます。一方戦後1950年代には、まがりなりにも、大学と地域教育者が一緒になって顕彰活動を行っています。同じ勝沼精蔵が会長として就任した2つの顕彰会が、こうも質の異なった会として組織されたのはいかなる理由からなのでしょう。今日大学の地域に果たす役割貢献が問われていますが、これらの活動を検証してみることが、ひとつの参考になるかもしれません。

名城小学校にある「伊藤圭介先生顕彰会」資料は、まだ全貌がはっきりしていません。今後資料調査が本格的に行われることによって、上記の問題が解明されることを期待します。

(神谷 智)



伊藤圭介先生顕彰会役員名簿 1956年

資料室だより

第3回 名古屋大学大学史資料室ワークショップ「アーカイブズのすすめ」 石原一則氏講演「神奈川県立公文書館における文書の 評価と選別」を開催いたしました。

大学史資料室では2004年10月24日（金）名古屋大学豊田講堂第1会議室で、第3回ワークショップ「アーカイブズのすすめ」として、神奈川県立公文書館副主幹石原一則さんに「神奈川県立公文書館における文書の評価と選別」と題して、講演をしていただきました。

行政文書もふくめ、文書の評価選別＝どの文書を保存しどの文書を破棄してよいのかという問題は、文書を管理・保存する部署ならばどこでも直面しているにもかかわらず、なかなか明確な判断基準ができないという問題かと思えます。そこで、神奈川県立公文書館において文書の評価・選別に実際に携わっておられ、数多くの研究業績をもって見える石原一則さんに講演をお願いし、神奈川県立公文書館における文書の評価・選別の現状と課題についてお話をいただき、これをもとに意見交換をしたいというのが、今回のワークショップの目的でした。

講演は、公文書はすべて公文書館に引継・引渡されるようにし、公文書館で文書の選別・破棄が行われる。文書がない（破棄された）ことを証拠づけるための、選別基準およびその細目を用意して選別する。評価選別を早めに行う必要があり、そのためには現用文書の段階から、文書館が文書内容を把握している必要がある。などがおまな内容でした。

講演後に、質疑討論が行われ、文書館は組織全体の業務内容をすべて知らないといけないのか、複数ある同一文書をどこで保存しどこで破棄するのか、中間保管庫と文書館とにおける保管方法の違い、担当者と利用者間で保存されるべき文書について考え方が異なる場合があるのはどう対処するのか、などについて活発に意見交換が行われました。参加者は約60名でした。

なお、この講演内容は当資料室から2004年3月末発行予定の『名古屋大学史紀要 第12号』に掲載されます。ご希望の方がございましたら、本ニュース最終頁の問い合わせ先まで mail・FAX・郵便でお申し込み下さい。



資料室日誌(抄)

- 8月8日 山口・神谷室員、京都市へ出張(京都大学文書館)。
- 8月19日 名大大学院生命農学研究科より、非現用文書を移管。
- 8月20日 榎本太名大名誉教授より、文学部第1回卒業生関係写真を受贈。
名大広報プラザより、印刷刊行物等を移管。
- 8月21日 神谷室員、『伊藤圭介生誕200年記念展示会』WGに出席。
- 8月26日 名大名誉教授3名および名大大学院生命農学研究科教員、芦田淳名大元学長資料および資料室見学のため来室。
- 9月2日 核融合科学研究所名誉教授3名・教員・事務員、アーカイブ設立の参考調査のため来室。
- 9月10日 名大内各部署に平成14年度刊行印刷物の提供を依頼。
- 10月1日 山口・神谷室員、長崎市出張(長崎大学、全国大学史資料協議会に参加、3日まで)。
- 10月4日 神谷室員、東京都出張(学習院大学、日本アーカイブズ学会(仮称)発足準備大会に参加)。
- 10月6日 後期全学教養科目『情報公開と文書資料 文書の世界を歩く』授業を開始。
- 10月10日 ビデオ製作会社員4名、渋沢元治元学長資料の撮影のため来室。
- 10月15日 『名古屋大学大学史資料室ニュース』第15号を刊行。
- 10月18日 加藤室長・神谷室員、名大附属図書館『伊藤圭介生誕200年記念展示会』および講演会に参加。
- 10月20日 中田實名大名誉教授より、旧教養部・職員組合関係資料を受贈。
- 10月21日 大学史資料室協議委員会(第11回)を開催。
- 10月24日 第3回名古屋大学大学史資料室ワークショップ『アーカイブズのすすめ 神奈川県立公文書館における文書の評価と選別』を開催。
- 10月27日 名大生物機能開発利用研究センター教員、芦田先生関係資料寄贈のため来室。
- 10月31日 名大総務部企画広報室より、他大学の学報等を移管。
- 11月2日 『ちょっと名大史』を総務部企画広報室より刊行。
- 11月10日 大学史資料室運営委員会(第12回)を開催。
- 11月13日 生協教職員委員会委員、資料撮影のため来室。「かけはし200号」に記事掲載。
- 11月18日 大学史資料室協議委員会(第12回)を開催。
- 11月26日 江崎計三氏より、「八高生青春像(ミニチュア)」を受贈。
- 11月27日 富田武名大名誉教授、愛知県医学校関係写真寄贈のため来室。
- 12月6日 柴田義守氏より、愛知医学校教員柴田邵平資料を借用。
- 12月13日 山口室員、京都市へ出張(京都大学百周年時計台記念館竣工式典および祝賀会に参加)。
名大総長より、名古屋市営地下鉄・名古屋大学開通記念式典配布物を受贈。
- 12月17日 名古屋大学主催『名古屋大学東京フォーラム』に名古屋大学沿革史パネルを出展。
- 12月22日 奈良教育大学企画広報室職員、大学行政文書管理について調査のため来室。
- 1月19日 喜多野徳俊氏より、医学部関係資料を受贈。
- 1月26日 後期全学教養科目授業を終了。

お詫びと訂正

先の大学史資料室ニュース第15号に記事の誤りがありました。3頁右列、下から12行目に「碑文大池青岑書」と書かれていますが、正確に申しますと実際に筆を執られた方が書家の大池氏です。文章を考えられた方、すなわち撰文された方は、本学文学研究科の田島毓堂教授でした。ここに文章の不正確さを慎んでお詫びを申し上げるとともに、訂正をさせていただきます。

『ちょっと名大史』と

『名古屋大学大学史資料室保存資料目録第4集』を刊行しました

大学史資料室では、去年11月に総務部企画広報室から『ちょっと名大史』を、本年2月に『名古屋大学大学史資料室保存資料目録第4集』を刊行しました。

『ちょっと名大史』は、学内外にある名古屋大学の歴史に関する記念物（記念碑・記念樹・記念建物など）を紹介したもので、2002年5月から名古屋大学の広報誌「名大トピックス」の裏表紙に連載しているものを、第18回までまとめて再録したものです。新入生をはじめ、一般の学生・院生・教職員の方を対象として、簡単にわかりやすく解説したもので、手軽に読めるものになっています。

目録は大学史資料室が保存している資料のうち、旧制高等学校・帝国大学・大学史・大学教育などの高等教育（史）や、文部省などの一般教育行政に関するものを「教育関係資料」として収録しました。この目録から当室で資料閲覧されることにより、当室の資料が本学内外の様々な業務・調査・教育・研究などに、広く役立つことを望んでおります。

上記刊行物をご希望の方がございましたら、下記問い合わせ先まで mail・FAX・郵便でお申し込み下さい。また目録第1～3集、名大史ブックレット第1～7巻、名古屋大学国際フォーラム特別展示『名古屋大学の軌跡 国際社会と知的交流』のCDおよびパンフレットも配布しておりますので、こちらについてもご連絡をお待ちしております（本体無料、郵送料負担、なお目録については第1・2集が残部僅少です）。

なお、大学史資料室では、名古屋大学に関する資料を、学内外にかかわらず広く収集しております。本目録に収録されていない資料で、その所在をご存じの方がございましたら、大学史資料室までご一報ください。また、学内外にある名古屋大学の歴史に関する記念物についての情報をお持ちの方も、大学史資料室までご連絡下さるようお願いいたします。



名古屋大学大学史資料室ニュース 第16号
Nagoya University Archives News No. 16

名古屋大学大学史資料室
室長 加藤 証 治（教授・併任）
専任室員 神谷 智（助手）
山口 拓史（助手）
事務員 増田 よしみ

発行日 2004年3月1日（年2回刊）
編集発行 名古屋大学大学史資料室
名古屋市中区千種区不老町〒464-8601
電話 & FAX：(052)789-2046
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷 株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田 2-16-38